

# 衛研だより

vol.  
65

## 目次

- 身近にある有毒植物に気をつけよう！ P1
- 麻しん(はしか)とは？ P2
- 感染症ピックアップ 伝染性紅斑が増えています ご注意を！ P4

## 身近にある有毒植物に気をつけよう！

近年、園芸に対する関心の高まりから、観賞用の植物が人気です。観賞用の植物の中には、有毒な成分を持つものがあることをご存知ですか？ 育てて、見て楽しむ分には問題ありませんが、有毒な観賞用の植物を間違えて食べてしまうことにより、食中毒が発生しています。どのような場合に食中毒が起こってしまうのでしょうか。



### ○ケース1 イヌサフラン

- 2018年4月、北海道に住む夫妻が自宅の庭に生えていた植物を採って食べたところ、下痢・嘔吐の症状を現しました。
- 夫妻は数年前からギョウジャニンニクという食用植物を庭で育てていました。
- ギョウジャニンニクと思って採って食べた植物が、実は有毒な観賞用の植物であるイヌサフランでした。イヌサフランには、コルヒチンという有毒成分が含まれています。



ギョウジャニンニクの葉



イヌサフランの葉

- イヌサフランは、ギョウジャニンニクと葉が似ていて、誤食されることがあります。また、球根をたまねぎやじゃがいもと間違えて食べることもあります。

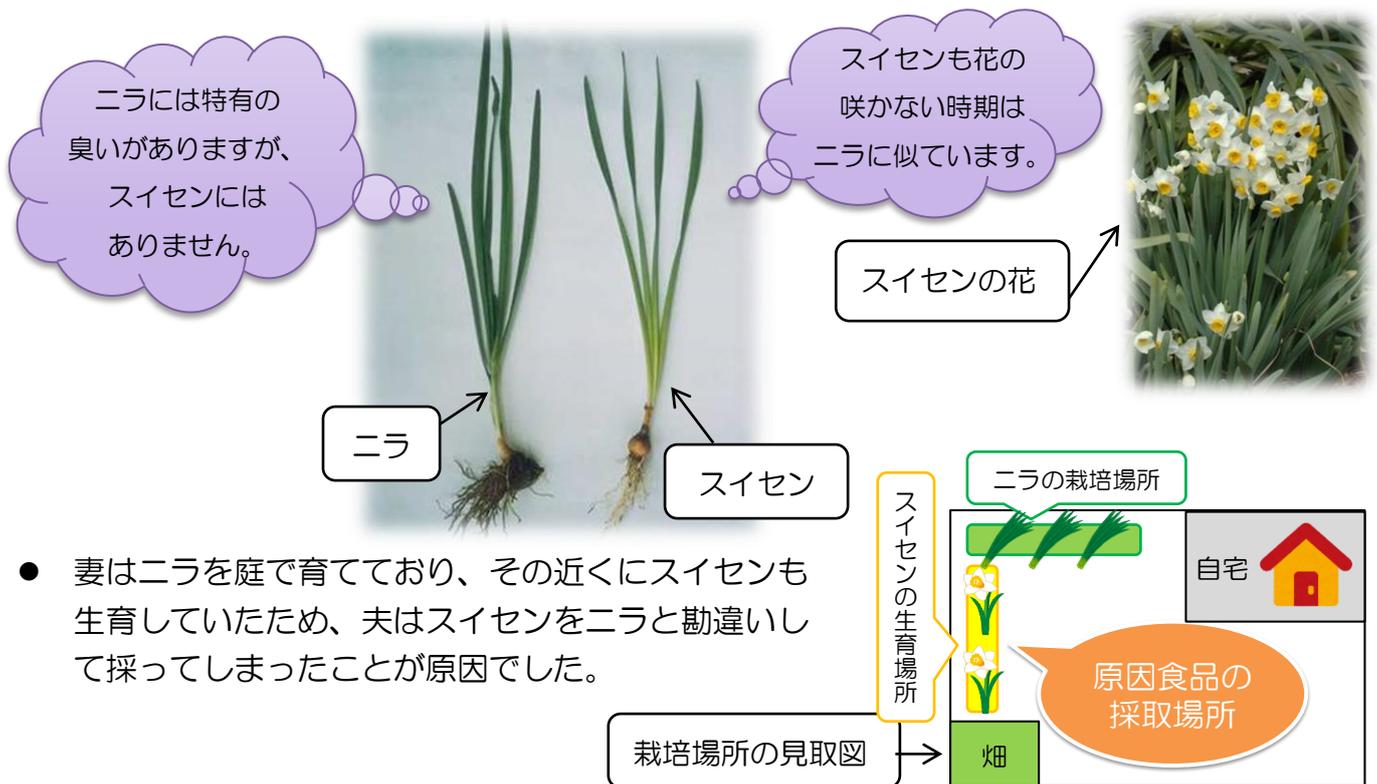
重症の場合、死亡することもあります。



イヌサフランの球根

### ○ケース2 スイセン

- 2018年4月、山梨県で妻が自宅の庭で育てていたニラを夫が採り、妻が調理をして家族全員で食べたところ、吐き気・嘔吐・下痢の症状を現しました。
- ニラと思って食べた植物が、実は有毒な観賞用の植物であるスイセンでした。スイセンには、リコリン等の有毒成分が含まれています。



- 妻はニラを庭で育てており、その近くにスイセンも生育していたため、夫はスイセンをニラと勘違いして採ってしまったことが原因でした。

### 📍 食中毒を防ぐポイント

- ✔️ 食用と正確に判断できない植物は食べてはいけません。
- ✔️ 食用の植物と観賞用の植物は分けて植えましょう。
- ✔️ 有毒な観賞用の植物は、乳幼児や子どもの手が届かないところに置きましょう。また、食用の植物と間違えることがあるので、台所には置かないようにしましょう。



写真：厚生労働省ホームページ（自然毒のリスクプロファイル）、東京都薬用植物園ホームページ  
 参考：食品衛生学会誌 第60巻 第2号 食中毒事件例（平成30年前期）  
 （食品検査担当 山本）

## 麻しん(はしか)とは？

2019年に入り、大阪府内で多数の麻しん患者の発生がみられ（5月末現在143人）、昨年一年間の発生数（15人）を大きく上回っています。堺市内でも12人の患者発生が確認されています。麻しんとはどんな感染症なのでしょう？

### ○麻しんの特徴

|        |  |
|--------|--|
| 病原体    | 麻しんウイルス（パラミクソウイルス科モリビリウイルス属）   |
| 潜伏期間   | 10～12日間  |
| 感染経路   | 空気感染、飛沫感染（せき、くしゃみ）、接触感染  |
| 典型的な症状 | ＜カタル期／前駆期＞<br>38℃前後の発熱が2～4日間続き、せき、鼻汁、くしゃみと結膜炎症状が現れ、次第に強くなる。乳幼児では下痢、腹痛を伴うことが多い。<br>熱が一時下がる頃、頬の粘膜に白色の小さな斑点（コプリック斑）が出現する。 |

#### <発疹期>

一時下がった熱が再び高くなり（39.5℃以上）、耳や首の後ろや前の額部分より鮮紅色の発しんが出現し、翌日には顔面から全身に広がる。

#### <回復期>

発しん出現後 3～4 日間続いた発熱が解熱し、発しんは退色し、全身状態は軽快する。

7～10 日後には回復しますが、肺炎や中耳炎などを合併する場合があります。発生頻度は低いですが、主に乳児期に麻しんにかかった場合には、平均 7 年の期間を経て重篤な中枢神経症状（あきゅうせいこうかせいぜんのうえん 亜急性硬化性全脳炎）を発症することもあります。

### ○修飾麻しん

前述のような典型的な麻しんの症状を示さない場合もあり、“修飾麻しん”とよばれます。これは、ワクチン接種による免疫の獲得が不十分な場合など、麻しんウイルスに対する免疫が十分でない人が麻しんウイルスに感染した場合にみられます。軽症の場合が多く、症状のみから診断することは難しく、検査による確定診断が必要です。

### ○近年の流行

日本国内で、かつては非常に多数の麻しん患者の発生がみられていました。近年、患者数は減少し、2015 年 3 月には、日本は麻しんの排除状態にあることが認定されました。

しかし、海外では麻しんの流行している国もあります。最近では、それらの国から帰国後、麻しんを発症する例やその方を発端とした集団感染が発生しています。麻しんは、非常に感染力が強いため、家族内や職場、医療機関等での二次感染が多く発生します。患者の年齢は、20 歳代、30 歳代が多く、ワクチン接種歴は、なし又は不明の方が多くなっています。



### ○予防法

麻しんに対する治療薬や予防薬はなく、予防には、ワクチンを接種し、免疫をつけておくことが最も有効です。現在、定期接種として 1 歳児と小学校就学前の 1 年間の者を対象に 2 回のワクチン接種（MR ワクチン：麻しん・風しん混合ワクチン）を受けることができます。2 回のワクチン接種を受けることで免疫が得られます。麻しんの流行地に行かれる方や感染のリスクの高い方は、予防接種歴を確認し、接種回数が不足している場合には、接種を検討してください。



### ○「麻しんかな？」と思ったら

麻しんを疑って医療機関を受診する場合は、感染が広がらないよう事前に医療機関に「麻しんかもしれない」ということを連絡して、受診の仕方を確認してから受診してください。

### ○当所の対応

国の指針に基づき、流行状況の把握や防止等に役立てるため、当所では、麻しん発生時にはウイルス遺伝子検査及び遺伝子解析を実施しています。これらの検査や調査を迅速に行うことにより、当市保健所と連携しながら、感染症の予防、まん延防止に努めています。

（ウイルス検査担当 三好）

## 感染症トピックス

# 伝染性紅斑が増えています ご注意を！

伝染性紅斑は春から夏にかけて流行する傾向があり、4～5年程度の周期で流行がみられます。堺市内では前回 2015 年に流行しました。下図のように、現在、過去5年間の同時期と比べ、かなり多い水準で推移しており、注意が必要です。

### ○伝染性紅斑とは

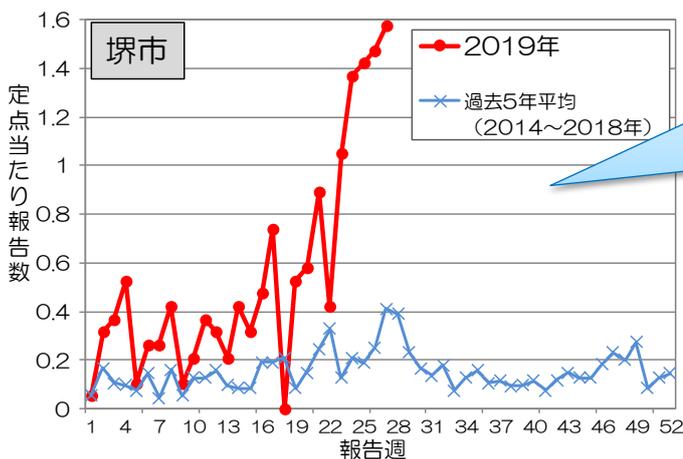
|      |  |
|------|--|
| 病原体  | ヒトパルボウイルス B19  |
| 潜伏期間 | 4～15 日程度   |
| 感染経路 | 咳や鼻水などによる飛沫・接触感染   |
| 症状   | 軽いかぜ症状と、両ほお、腕、足にレース様の赤い発しんが現れる。<br>大人では関節痛や頭痛が見られることもある。 |
| 治療   | 特異的な治療方法はなく、対症療法が中心。                                     |

「リンゴ病」とも呼ばれます。

原因ウイルスは、発しんが出る7～10 日前に最も多く、発しんが現れた時期には感染力は消失しています。

堺市感染症情報センターでは、堺市内の感染症発生状況の情報提供を行っています。最新情報はこちらでご確認ください。

[http://www.city.sakai.lg.jp/kenko/kenko/hokencenter/eiken/id\\_db/eiken.html](http://www.city.sakai.lg.jp/kenko/kenko/hokencenter/eiken/id_db/eiken.html)



妊娠中の方が感染すると、流産や胎児の異常を引き起こすことが報告されています。流行時には、かぜ様症状の人に近づかないようにしましょう。

※定点当たり報告数とは…

1 週間ごとの患者報告数を感染症発生動向調査事業の報告にご協力いただいている医療機関数で割ったものです。なお、伝染性紅斑の警報レベル開始基準値は 2 です。

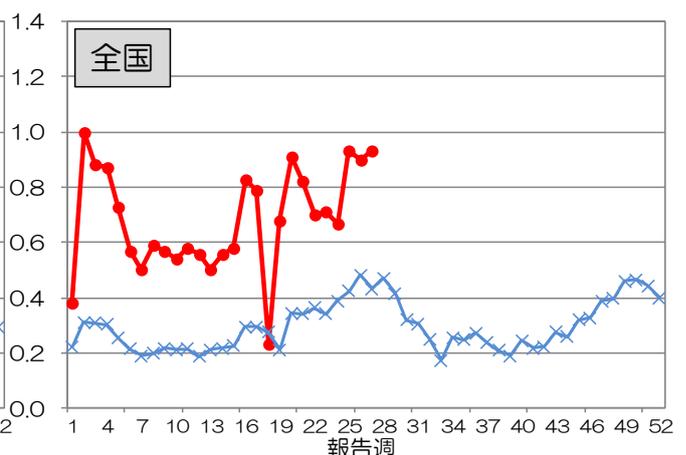
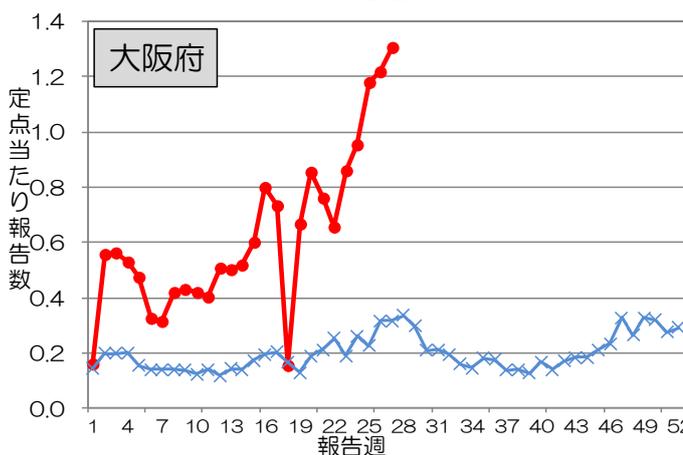


図. 伝染性紅斑の定点当たり報告数の推移 (企画調整担当 木村)

発行者 堺市衛生研究所長 山本 憲 〒590-0953 大阪府堺市堺区甲斐町東 3-2-8  
編集委員長 企画調整担当 江渡 亜紀 TEL 072(238)1848 FAX 072(227)9991  
E-mail eiken@city.sakai.lg.jp

「衛研だより」では、みなさまのご意見、ご感想をお待ちしております。